

寄稿

外国につながる子どもたちと共に —私たちの日本語学習支援—

外国人・帰国者の子どもの日本語学習支援ボランティア
札幌子ども日本語クラブ 代表 谷 光

多様なバックグラウンドをもつ子どもたちと

札幌子ども日本語クラブは2001年に中国帰国者の子どもたちの支援を目的に結成されました。その後、公的支援の必要性を訴え続けた結果、2006年に札幌市教育委員会が「札幌市帰国・外国人児童生徒教育支援事業」を始めることになりました。その年度は9校12名の支援でしたが2024年度には129校200名、実に約16倍になっています。子どもたちの国籍・母語もおおよそ30か国、来日の背景も多様化しています。共通しているのは親の都合で来日したことです。そんな子どもたちの抱える困難も一人ひとり違います。中には日本生まれ、幼少期から日本で育ってきたので生活に必要な日本語にはあまり困っていないという子も少なくありません。だからと言って学校で困っていることがないかというそんなことはありません。日常生活に必要な生活言語は2〜3年で獲得できますが、教科書に出てくる言葉、思考に欠かすことのできない学習言語の獲得には5年〜7年かかると言われています。授業について行くのも友達をつくるのも大変なことなのです。

子どもたちからエネルギーをもらっています

私たち指導協力者という名のボランティアは学校に出かけて、別室でマンツーマンの支援をする「取り出し指導」をします。対象は小1から中3までの子どもたちです。

オーストラリアから来た小学校1年生のOさんとのエピソードです。Oさんの母語は英語です。はじめは英語も交えての支援です。初めての支援の日、ハキハキと答え、自己紹介もしっかりできました。2回目は、初めから少し涙目でした。勉強よりはリラックスさせることだと思い、一緒に折り紙をしました。3回目の時は、朝、お父さんに玄関まで送ってきてもらっていました。その日は、途中で涙を浮かべて「ママに会いたい」といいます。どうやら、「頑張らなくちゃ」と緊張していた気持ちが切れたのか、学校に来るのがしんどくなったようです。それはそうです。いきなり言葉のわからない教室という異世界に投げ入れられたのですから。「何をしたい?」と聞くと「折り紙をしたい」というので一緒に折り紙をしました。毎回、まずは歌遊び、すごろく遊び、折り紙の本を見ながらリクエストに応じて折り紙と、リラックスすることを大切にして、ゆっくりひらかななどの勉強に入ります。幸い、一年上に同じマンションから通っているアメリカから来ている仲良しの女の子がいるので、休み時間には英語でおしゃべりができることもあって少しずつ元気になりました。1年生の後半には、私の質問にわざと違うことを言って笑ったりする

茶目っ気も見せるようになり、今日は「漢字の勉強をしようか」と言うと「かんじはきらい」と拒否するなど自分の意見をはっきりと伝えられるようになりました。

この学校では、台湾から来た兄弟、アメリカから来た女の子と4人の子どもたちの支援をしています。

教室では緊張している子どもたちも、部屋にやってくると元気いっぱいの素顔を見せてくれます。遊んだりおしゃべりしたりしながら、日本語を学び、日本での生活を楽しく過ごしてもらうことを大切にしています。そんな子どもたちからエネルギーをもらう毎日でした。

移動する子どもたち

日本語教育の研究者の川上郁雄先生(早稲田大学)が「移動する子ども」という提起をしています。労働、移住、避難、結婚、留学等の理由で大量の人口が国境を越えて移動するグローバルな時代です。その大人たちの移動にともない移動する子どもたちのことです。幼少期に複数言語環境で成長する子どもたちが増加しています。また、最近是这样した子どもたちのことをCLD児=(Culturally and Linguistically Diverse children: 文化的言語的に多様な背景を持つ子ども)との捉え方がされています。この4人もそんな子どもたちです。

日本での楽しかった経験が

これからの人生に生きることを願って

はじめは全く日本語を話せなかったバングラディッシュから来たH君は1年の間に日常会話がなんとなくできるようになりました。休み時間が終わると「カタキたのしかったよ」と汗だくで部屋にやってきました。運動会では学年みんなで踊る「エイサー」を元気いっぱい踊っていました。そんな彼もお父さんの日本での仕事が終わって国に帰ることになり、お別れの日が近づいてきました。学級のみんなへのお別れのあいさつと「ぼくの好きなバングラディッシュの料理」という壁新聞を一緒に作りました。お別れ会で学級のみんなに発表して大きな拍手をもらって嬉しそうでした。

札幌市は、昨年「世界中の多様な人々とともに生きる都市さつばろ」をめざし「多文化共生・国際交流基本方針」を策定しました。私たちは、その方針にふさわしい事業の充実を願って活動を続けています。

谷 光(たにあきら)

1943年生まれ。北海道教育大札幌校を卒業後、小学校教師として市内の小学校5校に勤務。退職後、専門学校の日本語教師養成課程で若者と一緒に半年学ぶ。その後、外国につながる子どもたちの支援をしているボランティア団体・札幌子ども日本語クラブに参加。2006年から会の代表。他に民間の子育て・教育の相談機関の北海道子どもセンター運営委員長など子どもたちの幸せを願って活動しています。



みんなで楽しめる場ってどんな場所？ ——いろいろな視点から考えてみよう！

前回に続き、今回もデフ・パペットシアター・ひとみ（以下デフパペ）のお二人にお話をお聞きします。

正木：活動の中で、特に印象に残っている出来事がありますか？

榎本：公演が終わったあとは、公演準備をしてくれた地元の実行委員さんたちと交流会を開くのが恒例でした。単に作品を届けるだけでなく、「次の公演でまた会いましょうね」とハンドタッチをする関係性を大切にしてきたのです。

森元：デフパペの活動が始まったころは、全国各地に手話サークルが広がりはじめた時期でした。ろう者も聴者も一緒に劇を観るという体験が、地域に新しいつながりを生んでいったように思います。

数千人規模の小さな地域や島での公演では、障がいのある人とどう関わるか、どんな街をつくっていくのかという問いに、私たちの活動が直接触れることができたと感じています。

正木：デフパペの活動が、社会にもたらした影響とは？

榎本：「聞こえる／聞こえない」といった違いを超えて、沢山話し合いながら、作品を大事に育ててきました。

私たちの活動は違いがあっても、それでいい、というメッセージに繋がると考えています。

森元：ろう者が、演劇を「職業」として続けていくこと自体が社会にとって意味があると感じます。今でこそ、インクルーシブな取り組みをする団体も増えてきましたが、私たちが始めた頃はほとんど前例がありませんでしたから。

正木：今後、誰もが芸術を楽しめる社会にするには、何が必要でしょうか？

森元：演劇を“ライブ”で観るということが、これからどうなっていくのか。人がわざわざ劇場に足を運ぶのは、どんな体験を求めていることなのか。劇場という空間自体が持つ意味や価値も、今後どう変化していくのでしょうか。ストーリーを伝えるためだけに舞台をやっているわけではなく、五感を通じて何かを「共有する」ことこそが演劇の本質だと思っています。今、その本質がどこにあるのか。正直、少し危惧している部分もあります。

榎本：私が大切にしているのは、ろう者と聴者の間にある「文化のズレ」を消さずに表現すること。そのズレを見せることで、観客も自分とは違う誰かの生き方を受け入れるきっかけになるのではないかと。

正木：次世代に向けた芸術の場づくりについてはどうお考えですか？

榎本：開演前や終演後に、劇場の中で観客と交流できる場をつくるのが、なかなか難しいと

感じています。でも、子どもたちが自由に遊べる広場や、お客様と自然に交流できる場があれば、そこが次の芸術の出発点になるかもしれません。

森元：劇団が面白い作品をつくるよう努力するのは当然ですが、地域の人たちがどう関わるかも重要です。たとえば瀬戸内国際芸術祭では、地域と芸術が出会い、丁寧にプロセスを積み重ね、島民みんなが協力していく、そのプロセス自体に価値があるのではないだろうか。私たちの原点も、やっぱりそこにあるのだと思います。今は“真実が見えにくい時代”とも言われています。だけど私たちの仕事は、そんな時代に「真実ってこういうことかもしれない」と、もう一度人の感覚を呼び覚ますようなものを届けることだと思っています。AIでは代替できない、人間にしかできない営み—それが芸術であり、古代から続くその本質を、これからも大切にしていきたいですね。

正木 千尋(まさき ちひろ)

人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」にて7年間、企画制作を担当。その後、仙台に拠点を移し、NPO法人エイブル・アート・ジャパン主催「広場の人形劇」など、障がいのある方々と舞台をつくる事業にコーディネーターとして携わる。現在は一般社団法人パップスの共同代表として、「ひとりに寄り添う人形劇(観客は一人)」の開発を行い、誰もが芸術を楽しめる場づくりを目指して活動している。



ほん MA・SO・BO シェルジュ HON-CIERGE

本の案内人「本シェルジュ」
厳選本の紹介
岸さん編 ⑨

岸 春江(きし はるえ)

フリーアナウンサー・絵本ナビゲーター・絵本専門士・絵本セラピスト®／自宅に約3000冊の絵本を所有。主宰の「ファンタジアパル」は2019年、北海道読書推進運動協議会「優良読書グループ 奨励賞」受賞



「うずらちゃんのかくれんぼ」

きとももこさく／福音館書店

じゃんけんぽん!もういいかい?まあだだよ。うずらちゃんとひよこちゃんが、鮮やかな草花の中で始めたかくれんぼ。無邪気なやりとりで心が和み、繰り返される勝負(じゃんけん)と冒険(かくれんぼ)の展開に、子どもの好奇心がくすぐられます。皇室の愛子さまも読まれていたと知って、私の娘が2歳のときに手に取った絵本です。絵の中にはちいさな伏線がたくさん隠れていて、読むたびに新しい発見があります。展開はシンプルながら、言葉のリズムも心地よく、何度読んでも飽きません。中はもちろん、表紙と裏表紙のすみずみにも注目してみてください。出産祝いにもおすすめです。



「もみじのてがみ」

きくちちき／小峰書店

ねずみのもとに届いた、真っ赤なもみじの手紙。「ゆき ふるの?」と尋ねたねずみは、仲間を誘ってもみじを探しに出かけます。世界最大規模の絵本原画展「プラティスラヴァ世界絵本原画展」で金牌を受賞した作品です。横長の画面いっぱい、にじんだ線で描かれた森の木々や葉から、澄んだ空気や山深さが伝わってきます。とくに、ねずみたちがもみじを見つけたときの風景は圧巻です。赤く染まった山々を見つめるその先に、北海道出身の作者ならではの視点で、冬の気配まで感じさせてくれます。優しいタッチでありながらダイナミックに描かれたこの絵本。文字は少なめで、お子さんからおとなまで、芸術作品としても楽しめます。



暑い夏です。7月上旬の中島児童会館・こぐま座と地域のお祭り「かもくま祭」では熱中症対策がシビアに迫られました。激化する「温暖化」はとても心配です。こどもが外で遊べない夏は、ほんとうに残念です。こどもが育つ「環境」がとても大事なのだとあらためて痛感する夏になりました。(戸塚)

お問い合わせ
お申し込み

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからもご覧いただけます。

